

# いしかわの遺跡

No.  
46  
2014.10.7

## 低地の掘立柱建物群

(弥生時代後期～古墳時代前期)



調査区全景 (北東から)

北吉田ノシロタ遺跡は羽咋郡志賀町北吉田地内に所在し、平成25年度の調査区は米町川左岸に位置します。調査区の中央部で弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする掘立柱建物群を確認しました。柱穴の径は大きいもので、1m近いものがあり、その中には長さ70cm余りの礎板が敷かれていたものもありました。礎板は建物の沈下防止のため、柱の底に敷かれたものと考えられており、柱に荷重が掛かる倉庫などの柱穴に多く見られます。

右写真の礎板を伴う建物は一般的な住居と考えるよりは、各柱に荷重が掛かる高床の倉庫のような建物と推定され、低地で暮らした人々の建築の知恵や工夫がしのべられます。



柱穴と礎板

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● http://www.ishikawa-maibun.or.jp/



みやほ いせき はくさんし  
宮保B遺跡 (白山市)



N区全景 (南東から)



S区全景 (南西から)



区画溝 (S区、南から)



土坑 (S区)

宮保B遺跡はJR松任<sup>まつとう</sup>駅から南西に3km、手取<sup>てどり</sup>川扇状地の扇中央部やや扇端よりに立地します。北陸新幹線(敦賀延伸)の建設工事に先立ち、白山総合車両所と在来線に挟まれた区域を調査しました。平成21・22・24年度の白山総合車両所建設に先立つ調査では、隣接する宮保館<sup>みやほかんせき</sup>跡とともに、堀で区画された中世の屋敷地が見つっています。

今回の調査でも幅約1.2m、深さ0.8mの南北方向の溝を軸に、浅く細い溝などで区画された中に、井戸の可能性が考えられる土坑、柱穴(小穴)などが配置されていました。一方、区画外では遺構が少なくなる様子が見られました。方形の竪穴状の土坑は、後世の削平を受けているため、比較的浅いものが多いようです。遺物は、12～15世紀の土師器<sup>はじきざら</sup>皿や青磁<sup>せいじ</sup>碗、越前焼や加賀焼の播鉢<sup>すりばち</sup>や甕<sup>かめ</sup>の一部などが出土しました。

以前の調査と同様、中世の屋敷地の一部であると考えられますが、西側ほど遺構が少なくなり、遺跡の縁辺部になるものと思われる。

H25  
発掘  
調査ひとつばり いせき こまつし  
一針C遺跡〔小松市〕

一針C遺跡は、小松市北部を流れる梯川おとしがわの中流域右岸に位置しています。この梯川の改修に先立って発掘調査を行いました。調査を進めていくと、時代の異なる2つの遺構面があることがわかりました。

上層の第1面では室町時代の集落を確認しました。主な遺構として掘立柱建物ほったてばしらたてもの、井戸、土坑、溝、小穴などがあります。調査区の中央で、3間×3間の掘立柱建物を確認しました。この建物の北東側3mの位置にも柱穴列がみられますが、調査区外にのびるため建物の規模はわかっていません。さらに、掘立柱建物の西辺に沿って溝があります。これを境としてその南西側では、小穴を多く検出しました。柱根が残った小穴があることから、南西側にも建物があった可能性があります。

土坑は十数基を確認しましたが、そのうちの一つは平面が卵形をしており、五輪塔ごりんとうの一部や銭貨せんかが出土したことから墓の可能性がります。

井戸には素掘りと板石組いたいしぐみのものがあります。板石組井戸は、調査区の南東端に位置しており、1枚の大きさが長さ90cm、幅45cm、厚さ8cmほどある板石を4枚方形に組み合わせて井戸枠とし、その下に結桶ゆいおけを置いていました。板石は全部で5枚出土しており、上段にも板石が組まれていた可能性があります。このような構造の井戸は県内でも類例が少なく貴重な調査成果です。井戸からは、陶磁器とうじき、石鉢いしぼちなどが出土しました。

下層の第2面では弥生時代から古墳時代の集落を確認しました。調査地の中央から南西側には土坑、溝、小穴などが分布します。北端と東端では川跡の一部が見つかりました。

平成26年度も発掘調査を継続しており、さらに遺跡の内容が明らかになるものと思われます。



掘立柱建物 (第1面)



板石組井戸 (第1面)



調査区全景 (第2面)



弥生土器の出土状況 (第2面)



## 七尾城跡 (七尾市)

七尾城は標高約 300m の本丸から尾根筋一帯に曲輪を連ねた戦国時代の山城で、麓には城下町が繁栄し、多くの遺構が良好な状態で残っていることが確認されています。平成 25 年度は、古屋敷町地内と小池川原町地内の 2 箇所ですら発掘調査を行いました。このうち、古屋敷町地内の調査区は前年度に第 1 面の調査を終了し、今回は第 2～4 面が対象となりました。

古屋敷町地内の調査区では、各面とも土師器皿、陶磁器の碗皿類のほか、埴埴等の遺物が出土しました。遺構は小穴、土坑、溝の他に石組井戸（第 2 面）、横板組井戸（第 3 面）、礎石を配した布掘り建物（第 4 面）などを確認しました。とりわけ、規模等は不明ながらも、各遺構面で確認した複数の建物礎石は、近接地でのこれまでの調査でも確認例がなく、鍛冶職人を始めとする職人の活動区域と考えられてきた同地の一角に、屋敷地が存在したことを示す遺構として注目されます。

小池川原町地内の調査区は城山より延びる丘陵裾と水田として利用されていた平地です。遺物は丘陵裾部を中心に、土師器皿や陶磁器の碗皿類、漆器碗などが出土しました。遺構は、平地部では小穴を数基確認したのみでしたが、丘陵裾部では土坑、石組井戸のほか、西側の 2 地点で丘陵裾削平後の盛土整地面に建設された路面幅約 3 m の道路遺構を確認しました。これらは丘陵裾沿いに大谷川上流方向へ延びていることから、庄津川と大谷川間の尾根上に設けられた曲輪群へ至る経路の可能性があり、注目されます。

能越自動車道の建設工事に先立って平成 17 年度から行ってきた七尾城跡の発掘調査は、今回の第 9 次調査をもって終了しました。



第 4 面布掘り建物 (古屋敷町)



第 4 面完掘状況 (古屋敷町)



道路遺構 (小池川原町)



完掘状況 (小池川原町)

古代  
体験

## 縄文土器・土偶づくり

2回連続講座で、第1回（5月18日）に縄文土器づくり、第2回（6月7日）に土器野焼きや土偶づくりを行いました。

縄文土器づくりでは、まず時期ごとの土器文様の特徴を細かく解説しました。そして県内から出土した土器（中期の深鉢5点、後期の深鉢2点）をモデルにして製作が行われました。中期に見られるダイナミックな渦巻き文様が特徴の土器が人気の的でしたが、胴部が外側に大きく開き成形が難しい、後期の土器に挑戦する方もいました。

土器野焼きは昨年に引き続き、土器を中央に置き、周囲で薪を焚き、徐々に火を近づけていく方法をとりました。最初は黄土色であった土器表面の色が、紫色に変化していき、さらに本焼き中は、土器に煤がついて黒色になりました。次第に煤が燃え飛んで白色に変化し、焼成が終了し火床から取り出してしばらくすると、最後は赤色になりました。体験者は、本焼きの強烈な炎や、土器表面が刻々と変化する様子に感動していました。

土偶づくりは、金沢市米泉遺跡から出土した縄文時代後期の土偶をモデルに、実物大で製作しました。今回の連続講座は、縄文人の技や「こころ」に迫る内容になりました。



縄文土器の時期による移り変わりや文様の特徴を解説



実物を観察しながら、葉脈状文に挑戦



親子で楽しく土偶の製作



本焼き風景（野焼き広場）

古代  
体験

立体古墳模型づくり

平成26年8月24日(日)、能登の「雨の宮1号墳」(中能登町・国指定史跡)の発掘成果を学んで、その模型を製作する学習講座を実施しました。モデルは古墳時代前期に築造された全長64mの前方後方墳で、能登の代表的な古墳です。小学5年生から大人まで参加者は、まず雨の宮古墳群の解説ビデオで学習し、その後、のり付き発泡パネルを積み

重ね、粘土で墳丘整形、葺石の貼り付けと作業を進め、最後に割竹形木棺を収納する埋葬設備を墳丘上部に設け、200分の1の模型を仕上げました。

「難しかったけど、とてもおもしろかった。」「雨の宮古墳に行ってみたい。」など感想は様々でしたが、前方後方墳の模型づくりから古墳文化を学んでいただきました。



墳丘を整え葺石を貼る



後方部の仕上げ



模型の完成品

親と子の発掘体験教室

小学校4～6年生の児童とその保護者が親子で遺跡の発掘現場で土器や石器を掘り出し、洗浄作業でその特徴を学ぶ発掘体験教室を平成26年6月28日(土)に志賀町北吉田ノシロタ遺跡、7月26日(土)に小松市一針C遺跡の発掘調査現場で行いました。始めに調査員が遺跡を解説し、ヘルメットを被って発掘にチャレンジしました。

発掘が進み土器が見え始めると、各親子とも慎重な作業で掘り出し、職員の出土品解説で、古代の様子を想像していました。また、カメラで記録するお父さん、三世代の家族連れなど、微笑ましい光景が各所で見られました。親子で掘り出した出土品は、水洗いをする事で器形や文様を観察していただき、『埋(マイ)レポート』に記録されました。最後に、隊長から『こども考古学者認定証』と参加の記念品が渡されました。



職員が出土品を説明



親子で共同作業



出土品を写真撮影



洗浄作業

情報  
発信

## 第16回いしかわの発掘展「ものづくりの技 -その流れを探る-」

平成26年7月18日から9月7日にかけて、「ものづくりの技」というテーマで、縄文時代から近世まで約270点の出土品を展示しました。

「漆製品」「陶磁器」「金工品」の3分野を取り上げ、ものづくりの技や技術革新が、伝統を生み出していく様子を紹介しました。縄文時代の漆塗櫛や籃胎漆器、展示が難しい中世・近世の漆器椀の華やかな文様、初めての展示となった七尾城跡の鎧部品や宮保B館跡の烏帽子、道村B遺跡の古代の鍛冶炉など、夏休み中の子どもたちも興味津々で見っていました。須恵器・陶器・磁器を触って比べるコーナーでは実際の出土品の感触をじっくりと味わう様子が見られました。



展示風景(研修室)



道村B遺跡の鍛冶炉と馬具



見学風景



触れて確かめる子どもたち

## 平成26年度秋～冬 古代体験のお知らせ

講座 考古学最前線

## 講演「縄文時代の食と手仕事」

山本直人(名古屋大学大学院文学研究科教授)

考古学から縄文時代の植物利用の様子を解説、あわせて県内遺跡の関連資料も報告

日時 12月6日(土) 14:00～16:30

会場 県立美術館ホール(入場無料)

個人体験 古代の文房具づくり

古代の文房具の代表として、短冊状の木簡製作と書写、粘土で硯の製作体験

体験期間：11/1日(土)～9日(日)

個人体験 木簡 年賀状づくり

はがきサイズ木簡に文字や絵を描き、特製の年賀状を製作(一人1枚)

体験期間：11/29(土)～12/14(日)

## 古代体験学習講座「弥生の鏡・剣づくり」

金属を溶かして弥生時代の鏡と剣の小型品を製作

日時 11月30日(日) 9:00～15:00

対象 小学校5年生～一般

受付 10/15(水)～(電話申込み、先着順)

個人体験 古代の独楽づくり

丸木の独楽と布のムチをつくり、古代の回し方で遊ぶ

体験期間：H27. 1/4(日)～18(日)

## 訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

### くにしていしせき 寺家遺跡

寺家遺跡は羽咋市寺家町から柳田町にかけて  
 所在します。奈良時代から平安時代（8世紀から9  
 世紀ころ）にかけて、国家が関わって、古代の神  
 社が祭りや祈りを行ったと考えられている祭祀遺跡  
 です。長らく海岸砂丘の下に埋もれていましたが、  
 昭和53年、能登海浜道路建設の際に発見されま  
 した。道路敷の発掘調査や、その後継続して行わ  
 れた確認調査によって範囲や内容が明らかになり、  
 平成24年1月に約58,000㎡が国の史跡に指定さ  
 れました。

大きな火を焚いて祭祀を行ったことを示す、大規  
 模な焼け土の面は全国的にも例がありません。ま

た、9世紀後半の大型掘立柱建物を中心に並んだ  
 建物群の一帯は、周辺から「宮厨」や、「宮」「司」  
 「司館」「奉」「神」などと墨書きされた土器が出  
 土したことから、祭祀具の保管施設や祭祀を管理  
 する人々の館があったと考えられています。さらに、  
 8世紀前半の竪穴建物群は古代の祭祀に従事する  
 人々の住居と考えられています。

地方ではほとんど出土例のない三彩陶器やガラ  
 ス容器、ガラス生産具のほか、銅鏡や銅製飾り金  
 具、鉄製鏡、鉄刀、勾玉など多様な祭祀遺物が  
 出土し、代表的な出土品は羽咋市歴史民俗資料  
 館で展示されています。



空から見た寺家遺跡



羽咋市歴史民俗資料館



資料館の寺家遺跡展示コーナー



「宮厨」墨書土器

所在地：羽咋市寺家町（史跡指定地）  
 交通：JR 羽咋駅から車で15分  
 のと里山海道柳田IC付近  
 問合せ先：羽咋市歴史民俗資料館  
 （展示施設） 羽咋市鶴多町鶴多田38-1  
 電話 0767-22-5998  
 開館時間 9:30～17:00  
 休館日 毎週月曜日、年末年始ほか

（写真提供 羽咋市教育委員会）